

## 一戸直蔵 野におりた志の人

中山 茂 リポート、1989年  
(シリーズ民間日本学者19), 1400円

専門書

お薦め度

☆☆☆☆☆

依頼もされていないのに、書評を書いてしまった。こんなことは始めてだ。本書は、明治から大正を一気に駆け抜けた烈火の研究者、一戸直蔵の伝記である。あなたは一戸を知っていたらどうか？ なぜなら、彼は、日本天文学会を立ち上げた真の功労者でありながら、明治アカデミズムの前に碎け散り、公の歴史から消された男だからだ。

ぼく自身も、数年前に初めて、一戸直蔵の名前にぶつかった(天文月報, 1991, 7, 230)。そして、最近になって、たまたま、学生が、上記の本を教えてくれた。そこには、『天文月報』など公の資料をみて想像していたより遙かにすごい人間がいた。著者の中山氏は、“一戸の生涯は科学者にしては波乱に満ちているので、奇人伝とすることは避け、できるだけオーソドックスな伝記にしたい”と思ったそうだ。その通り、淡々と事実が書いてあるにもかかわらず、その、あまりに激しい生の燃焼に、読んでいて、鬼気迫るものがあった。

一戸直蔵、1878年に本州最果ての地、津軽に生を受け、紆余曲折を経ながら、東京帝国大学星学科へ入学、さらに当時、新しい天文学の勃興期であったアメリカへ私費で留学し、(おそらく日本で初めて)天体物理学を修得して帰朝し、すぐさま東京帝国大学講師となった。29歳のことである。

その後の活躍はすさまじい。日本天文学会の創立、天文月報の創刊。研究者がアカデミズムのコミュニティに閉じこもっていた時代にあつての精力的な啓蒙活動(研究者としても精力的に仕事をし、異例の早さで、星学科で最初の論文博士を得ている)。また、新天文台候補地としての台湾の新高山調査行(これは半世紀後に岡山天文台に実を

結ぶ)、国際的な天文発見電報同盟への加盟のお膳立て、1910年に回帰したハレー彗星の大連観測のプロモート、無線報時の実用化、太陽観測所の計画などなど、一戸直蔵の押し進めた学問事業は枚挙にいとまが付きません。しかも、これら数々の事業を、表に出ることなく、裏で立ち働いた。

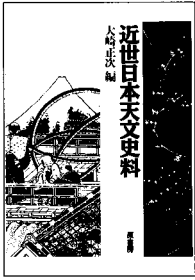
しかし、壮大なビジョンのもと、学問を押し進めるため、歯に衣着せらずに正論をずけずけ言う一戸を権力者がよく思うはずはない。とくになんら学問的業績もない官僚台長、寺尾寿にとっては、目の上の大たんこぶだったらしい。ついに、1911年、麻布にあった東京天文台の移転問題の対立を期に、パージされ天文台を追われたのである。

職を奪われ学界から締め出されたことは、大きな挫折ではあったが、あくまで行動の人、一戸直蔵である。野に下ってから、日本版ネイチャーをめざして『現代之科学』Scientific Gazetteを創刊し、反アカデミズムの科学啓蒙家として腕を奮っていく。しかし留学時代からの長年の無理がたたり、1920年、42歳という若さで、志半ばにして斃れたのである。明るい告别式であったという。

彼の行動原理は、中山氏によると、“単なる出世や名を竹帚に垂れるという態の自己顕示欲ではなく、コーリング(召命)とでもいうのか、志を持って事にあたり、それを自らに使命として課す、一種のアルトゥルーイズム(利他主義)”だそうだ。

ああ、現代日本天文学界の黎明期には、こんなスゲー奴がいたんだ、ガンバラナクッチャ、とつくづく思ってしまう。研究が1日ぐらい遅れてもいいから、是非、一度読んで欲しい本である。

福江 純 (大阪教育大)



## 近世日本天文史料

大崎正次編

1994年2月発行

原書房, 620+XVII頁, 18540円

専門書

お薦め度

☆☆☆☆☆

1935年に出版された神田茂先生の「日本天文史料」に収められている史料は、西暦1600年までのものだけであったが、今回の本書には、1601年から1867年までの、江戸時代の天文史料が収録されていて、先の史料集の続編となっている。

編者の大崎正次(しょうじ)氏は、今から60年まえに広瀬秀雄氏と共に神田先生の史料収集を手伝はれた人で、今回、病身の上にご高齢にも拘らず、本書の出版を成し遂げられたご努力には敬服のほかはない。

実は、先の史料の収集が行なわれた時、同時に1601年以後の史料も沢山集められていた。しかし神田先生のお考えによって、1600年までのものしか出版されず、それ以後のものは、永い間、神田先生の手元で眠っていたのである。そして、一時行方不明になっていたのを、偶然、大崎氏が古本屋で発見された事が本書の出版の直接のきっかけとなったのである。そして、新たな史料の収集には、大谷光男氏(二松学舎大学教授・日本史)の協力と援助があり、その結果、本書が完成した事は心から喜びにたえない。

今回の史料集の特色は、一般の歴史家にも役に立つように、それぞれの天文現象に対する記述者の考え方や、その前後の出来事などを省略せずに出来るだけ収録しようとした点にある。さらに、検証可能な天文現象には、その事象を確かめる事の出来る注記が付けられている。また、口絵や、巻末には付図があり、天文月報に一度掲載されたことがある琉球の天文史料も収録されていて、読んだり、眺めたりも出来る史料集と言えよう。

本書の内容は、先の「天文史料」とほぼ同じで

日食、月食、月星接近、星食、惑星現象、星屋見流星、隕石、彗星客星、老人星、怪星、異星と雑象の順に類別され、雑象は、さらに日暈、月暈、旗雲、赤雲、白気、赤気 に分類されている。

怪星、異星と雑象の項は、先の「天文史料」とやや異なるところで、これらは天象ではなく、むしろ気象現象と思われる。しかし当時の人は、これも「天文」の一種と見ていたので、これらの史料は昔の天文に関する思想や考え方などを知る良い手がかりになるだろう。日食や月食については渡辺敏夫氏の「日食月食宝典」によって、京都や江戸の食甚時刻や食分が注記されている。ところが、月食については、ところどころに「月食なし」とあるが、実はその大部分は半影月食である。このことは、先の「天文史料」でも同様で、参考用に用いられたオッポルトツエルや、渡辺氏の宝典では半影食は除外されていたのである。もっとも、当時の暦では、月の要素の不備の為、本影食として予報されたものもあろうし、中には実際に半影食を見た記録があるかも知れない。

江戸時代には、幕府の天文方や、大阪の間家の観測記録などがあり、その他にも地方史料には、膨大な天文記録が残されている。本書には、そのほんの一部しか収録されていない。今後、本書の出版を契機として、それらの調査や編纂が進められるものと期待される。何はともあれ、本書によって、明治以前の日本の天文史料が一通り全て収集されたことになったのである。なお、先の「日本天文史料」と、「日本天文史料総攬」は、1978年に本書と同じ原書房から復刻出版されている。

長谷川一郎(大手前女子短期大)